



# デコ通 2



「デコ通」通の必携参考書

特集

## 市民の自主的な事業が地域を変える!

特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ 理事長

大西 光夫さん インタビュー

今号のDECO通の特集は「地域づくり」。様々なセクターの様々な取り組みがあるなかで今回は、行政の政策から、一人ひとりの地域づくりプレイヤーの育成まで、幅広く支援している中間支援組織のNPO法人ボランタリーネイバーズ・大西理事長にお話を伺いました。

聞き手：蒲勇介 (ORGAN デザイン室)



支援する事業は様々ですが、市民が自分たちの地域の課題や社会課題に自主的に取り組むときに、必要な支援をするということが私たちの志です。

### 市民による自主的な事業を 応援する中間支援組織

「中間支援組織」といわれて、すぐに何をしているのかイメージがわく人は少ないでしょう。私たちは、福祉や環境、国際理解から農村再生まで、様々なテーマで行われる市民の自主的な活動を支援をしています。

例えば愛知県三河地方の山間部では、猪や鹿などが畑の作物を食べに来る被害が深刻です。猟師も高齢化しており、獣の数も増え続けています。岡崎市では、猟師が狩猟の技術を地域住民に伝え、自分たちの力で田畑を守ろうと動き出しています。

持続的に狩猟を続け、猪や鹿の肉を販売して収入を得ていくために、解体施設を作らなければならない。そこで働く人材を育て、また販売のためのマーケティングも必要です。地域の主体だけですべて行うのは難しい。私たちがネットワークと経験を活かして、ビジネスモデルをつくり、仕組みができれば、地域にバトンタッチする取り組みをしています。こうしたことが中間支援組織の一つの役割です。

また、高齢者や障害者の移動サービスを実施する運転手育成を行うために、県内の100団体以上の福祉系NPOの連携で生まれた研修組織の事務局を担うなど、スタートアップ時の支援なども積極的に取り組んでいます。

その他、助成金情報を提供したり、愛知万博の余剰金をつかった「あいちモリコロ基金」(市民活動助成の公益信託)の設立を要望運動するなど、市民活動に必要なお金が回るしくみづくりにも力を入れています。

### 都市と農村をつなぎ、 自主的な地域主体をつくる

日本の戦後のひずみは急激な都市化で人口が農村から都市へ集中し、農村(農林漁業)をベースとした社会構造が一気に変わってきたことによるものが大きいと思います。三河山間部の人口は、ピーク時に比べて1/3まで減り高齢化率も50%に迫っています。近い将来、誰もいなくなるかも知れません。このような状況ですが、「わしらの集落では孤独死なんかおきん」とおっしゃいますように、地域コミュニティが強く残っています。私たちは、奥三河に伝わる「花祭り」という伝統的な祭りの保存継承に参加しています。祭りの季節になれば、集落の全員が参加し、それぞれ役割を持ち、子どもが地域のお年寄りにお囃子や舞を教わったり、郷土食を食べたり、夜を徹しての神事と神楽舞による「花祭り」を完成させるのです。私たちは、お手伝い・裏方役で参加させてもらっていますが、都市では体験できない地域コミュニティの大切さに気付くことができます。「祭り」は、地域コミュニティを保存し人々をつなぎあわせる手法です。

都市部でも、高齢化率60%の団地なども出てきていますので、地域によって課題は様々ですが、その地域に住む人が自主的に行動することでしか、解決できない課題ばかりです。地域ぐるみの祭りは、地域づくりの一つのヒントです。

profile 大西 光夫 おおにし みつお

1946年奈良県生まれ。92年「ネットワークピープルズプラン」、95年「市民活動の発展を考える討論会(市民フォーラム21)」、97年「NPO連絡会」、98年「まちづくり交流フォーラム」などの市民活動団体の立ち上げに携わり、2001年に「特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ」を設立し理事長に就任。NPOや市民主体のまちづくりが発展するための情報提供や各種研修、調査・提言活動、NPOのネットワーク形成や都市と農山村の共生関係づくりに取り組んでいる。

【特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ 理事長】

2面へGO!





## デンソーのボランティアで培った経験を、退職後、地域で活かそう！

現在、重点的に取り組んでいるのが「人」の問題です。NPO界では、「男の寿退社」という言葉があるように、若い人が定着できるには、まだ10年以上もかかると思っています。注目したいのは、シニア層・定年退職後の方々です。お金も経験も時間もあるこの方々が、地域や社会で活躍して頂けるとありがたいと思い、いろいろな試みを提供しています。愛知県の「まちの達人」という研修プログラムでは、3年間で300人近くの方が修了し、県内各地でグループを作り地域活動に取り組んでおられます。

デンソーさんは「ハートフルクラブ」など社員のボラン

ティア活動を積極的に取り組んでおられます。そうした経験を含め、現役時代のスキルを活かし、退職後、ぜひ地域や社会で活躍していただきたいです。

今の日本社会は大変な問題をたくさん抱えています。若者や子供たちにしてみると「こんな社会はあんたらおとなが作ったんだろ!? 責任とってよ!」と言いたいと思っています。その責任を果たすとともに、一方でやりがいや生きがい、楽しさを見出してほしいと思います。ボランティアは楽しい! シニア人生は20年以上あります!

—ありがとうございました。



1面の続きだよ!

連載

# DECOポンズボイス

「地域づくり」



林 光征さん  
〈デンソー工機部、  
09年度ボランティア表彰受賞者〉

## ボランティアのきっかけ

私が西尾市に住居を構えて約10年経った頃です。10歳の長男が地域のソフトボールクラブへ入っていて、妻に「試合があるから見に行ってみて!」と言われて見に行ったのがきっかけです。私も妻もソフトボール経験者でしたから、初めて子どもたちのプレーを見た瞬間あまりに上手でびっくり!というのが第一印象でした。

やがて長男が5年生になった時、当時の監督さんから「指導者がおらず困っているのだから教えてもらえないか」と依頼があり、『自然に引き受けることになった』のがボランティアの第一歩です。今まであまり構ってやれなかった長男とのスキンシップ、地域貢献、実業団チームでお世話になった恩返しになると思って始めました。

## 活動の内容

長男が6年生の時から5年間監督をし、その後はチームスタッフや協会支援などで早20年が経過しました。当初は長男の友人を誘い、近所の公園で練習をしていると、その友人のお父さんが1人、2人と増え、1年後には5人くらいのお父さんを巻き込んで練習できるようになりました。練習時間は毎週火・木の早朝と土日で、ソフトボール技術の向上だけでなく、コミュニケーションを通じた世の中の当たり前・エチケット・挨拶を主に指導しています。



## 体験して感じたこと

子どもにもプライドがある。そこをわかってやらないと子どもはついてこないと感じました。だから叱る時は真剣に叱らないといけないこと、よい時はほめ、悪い

時は元気づけることを学びました。親御さんが見に来た時は練習に入ってもらおうと子どものレベルもわかるし、自然に親子の対話もできる、さらにはこちらの指導の意図も伝わるというように一石三鳥で、子どもとのスキンシップを取ってもらえるようになったことが非常に良かったと感じています。

## 地域と関わること

また、監督を始めてからは親御さんや学校の先生ばかりでなく、地元と呼ばれる地域にまでつながりが広がり、学校・地域行事にも楽しんで参加できるようになりました。そういう心の交流があった人たちとは何年経っても続くんですが、100%の人が賛同しているかというところでもないですね。

中にはそんなこと関係ない!という方もみえます。まあしかし、そのうちわかってくれるだろうと思うのと長く続けるのが大切と考えながらやっています。

## 醍醐味

一番うれしいのは、子どもが教えたことを試合に出せた時に一緒になって喜びを分かち合えることです。普段は怖い監督の私がうれしい顔を見せると子どもたちもすごく喜んでくれ、そんな子どもたちの顔がいつまでも消えません。2年ほど前に卒業生が催してくれた新年会で「監督は恐かった!でも非常に楽しかった」とみんなが言うのを聞いて、いまさらですが救われる思いでした。今年の秋には卒業生の結婚式にも声を掛けてくれ、本当に長い間やってよかったと思います。